

見るべく与えられた悪の顔をまともに見よ

渡辺 久義

2017/ 02/ 05

数年前、まだこれほど歴史が急を告げていなかったころ、私はある小さな宗教的なグループで、イルミナティという恐ろしいカルト集団が、いかに世界を支配しているかという話をした。ある人が聞き終わって、「私はそういう悪の話でなく、神様の話を聞きたかった」と感想を述べた。米政府の背後にそういうものがあるという、メディアの決して取らない想定自体が、信じられず気に入らなかったのだと思う。

ジャーナリストでホイッスル・ブローアーの、アレックス・ジョーンズやデイヴィッド・シーマン (David Seaman) の話を、私はユーチューブでよく聞くが、彼らは、現在の“ピザゲイト” スキャンダルなどを含む、米支配体制の徹底した墮落と悪に触れながら、「このような悪魔崇拝が実在する以上、その反対の神が実在するはずで、私は神を選択する、神を信じて生きる」と、2人とも同じ意味のことを言っていた。こういう立場の人たちが宗教に触れ、自分の選択を表明することなど、かつてなかったであろう。今そういう時代になったということである。一人ひとりが自分の宗教的選択を迫られているのである。(ちなみに、私はアレックスの早口はほとんどわからず、字幕でかろうじてフォローしている。) アレックスなどは、街頭へ出て(選挙戦ではない)、クリントンらを指して「彼らは **devil worshipers** だ、間違えな」と必死に叫んでいる。

この事件に対する、少なくとも現在の、一般大衆の軽蔑的な反応には、幾重もの問題がある。(これを頭からフェイク・ニュースとして退ける人々は別として) まず、そんな事件は我々まともな人間のかかわるべきことではない、という冷ややかな反応。これがどこかの町の暴力団の話なら、「ほっておいても、やがて警察につかまるだろう」と一蹴してもよかろう。しかし彼らは、我々が目覚めて叫ばない限り、警察にはつかまらない。これは地球の支配者の共同体の、階級的なカルト(またはカルチャー)の問題だからである。

次に、これはいわゆる“趣味の悪い”話ではない。嫌悪すべき、耳を覆いたくなる事件だからといって、耳を覆っては逃げてはいけないということ。グローバリストやメディアは、こんな(ありもしない)ことに興味をもつ奴は、どうせ下劣な趣味をもつ人間だろうという、例によって、自分の罪状をもって相手をなじる方法を取るだろう。組織的なペドフィリアに子供の売買+殺人といったことは、あまりにも信じ難く、口にもできないために、それが彼

らの隠れ蓑になっていると考えねばならない。

前にも書いたように、我々（特に日本人）は、ルシファーとルシファーに魂を売った者たちの、悪行の極限がどういうものかを想像できない。世界的な組織を作って、大量の子供を誘拐し、集団暴行する支配階級の風習などというものを、我々は理解できない。しかしこれが事実であることは十分に実証されている。大量に出回っているピザゲイトの画像や証拠のほか、前に紹介した少女 Theresa の告白（告発）や、Hampstead Cover-Up といわれる子供虐待の証言などは、否定しようがない。

こういうものを我々は、ただ嫌悪したり逃げたりせず、しっかり見なければならぬ——ただし霊的な目によって。それだけでなく、自分には関係がないのではなく、自分もその犯罪を犯し得るものと考えねばならない。我々の生きているこの時代に、こういう世界的な大犯罪が暴露されたということは、それをしっかり見て、われ彼ともに飛躍するように意図されているのだと考えるべきだろう。我々は歴史を背負って生きている。我々を通じて人類が進化するのだから。確かに我々は、「彼ら」を選挙で選んだのではないが、その文化を共有している。彼らは我々の敵であるが、我々の一部でもある。

デイヴィッド・ウィルコックは、この世界の悪は徹底的に追及し暴かねばならない。しかし復讐してはならないと言う。復讐すればまた同じことの繰り返しだからである。命（いのち）は空間的にも時間的にも、すべて繋がっていると考えるならば、そうなるであろう。今、我々は壮大なドラマを見ている。人間の内面的な善悪闘争の劇であるドストエフスキーの小説が、現実展開されているようである。彼らの「純粋な悪」(unadulterated evil—P. C. Roberts) は、我々すべてが、我々を乗り越えるために存在する。

アメリカという国は、良くも悪くも世界の中心には違いない。万が一、ヒラリーが当選していたらどうなっていたらだろうか？ 彼女は、彼女自身が夫と共に大きく関係している（また、オバマも関係している——ピザ・ハウスでピンポンをしている写真がある）“ピザゲイト” スキャンダルをもみ消すために、どんな恐ろしい手段を使ったであろうか？ そして世界がどれほどの恐ろしい泥沼に突入したであろうか？ ヒラリーとビル・クリントンについては、今いくらでも資料が見つかるので、ご自分で調べていただきたい。

イルミナティとも New World Order とも「陰謀団」(the Cabal) とも呼ばれるこの集団は、単なる悪の集団ではない。彼らの中には、自分たちが歴史において「演ずべき役割」を自覚している哲学者がいる。私が昨年春、「我々はどういう世界に生きているのか——この異常な世界の背後に見える暗黒集団」 <http://www.dcsociety.org/2012/info2012/161010.pdf> という論文を書いたのは、この最後の引用文を載せたかったからである。(HiddenHand と

は、その哲学者の偽名である。 <http://www.dcsociety.org/2012/info2012/160107.pdf>)

(HiddenHand の言葉は) 権力エリートについての私の見方に、永久的な影響を与え、私は、彼らのものの見方をより多く学ぶことによって、現実のより高い理解が得られたように感じている。私はこれによって、実はエリートたちを許すことができた。なぜなら、より深いレベルでは、われわれ全部がつながっていて、「一者」の一部であり、実はすべてが、同じチームのためにプレーしているからである。長年私が、心の中に憎しみと恨みを抱き続けていたことは、甚だしい重荷であったが、今それを解放する選択をして、私は喜びを感じている。これは地上的観点からは理解しがたいことだが、われわれが自分の内なる自己を開発すればするほど、われわれがどこから来て、どのようにわれわれすべてが繋がっているかが、思い出せるようになる。